

## 封し込め（外出制限）：我々の＜脱成長＞となかば共鳴しあうもの

それは火曜日の昼の出来事だった。そして、誰もそのことを予期していたわけではなかった。私たちは、ほとんど何の抵抗もせず、この激変を受け入れたのだ。まず集団的な自粛、そして個人的な自粛、あるいはその逆か。これは、私たち、その他の脱成長派か期待していたであろう「サイト・ステップ」ではない。私たちが受けている**封し込め**の措置は、パンデミックの始まりにおいては公共政策の破産であり、その終わりににおいては権威主義的でテクノ・サイエンス的な管理をもたらすことは明らかではないのか？ これらは、成長、管理的、エリート的、下品で無神経という同じ生政治の裏と表なのである。それにもかかわらず、その**封し込め**には、コウノトリが宙づりになったステップのようでもあり、それは軽蔑されることではない。**封し込め**の後には、また不況があり、その弾みと余震があるだろう。しかし、**封し込め**の期間の間に、景気的情勢はどうかというなら、一種の＜脱成長＞が起こっているのだ。確かに。だがしかし、どのような＜脱成長＞なのか。

これは歴史的瞬間である。というのも、突然にスピードアップする経済の至上命令、そして常軌を逸した経済の至上命令だからなのだ。2020年3月17日に、フランスで、ある括弧が開かれた。おそらく5月か6月にはまた閉じられてしまうだろうか、グローバリゼーションの真っ只中で、そして全世界で、今、開かれている括弧のことだ。世界の人口の半分以上が**封し込め**の下にあるのだ！ 減少する生産、減少する消費、したがって、減少する抽出、減少する廃棄物、減少する汚染、減少する旅行、減少する騒音、減少する仕事、したがって、減少する収入だけでなく、休暇もほとんどなく、美術館訪問やコンサートもまったくなく、スポーツのイベントや“試合”も開催されない、という括弧が開かれている。すなわち、“本質的な物事”、その事自体、再定義すべきなのだが、それ以外は、何も無いのだ...

田舎に住んでいても都会に住んでいても、一定の生活の質は、非常に不平等なレベル(庭かベランダ、あるいは窓ぎわか、という違いはあっても)の「レジリアンス＝反発力」と看過できない苦痛によって、維持されている。つまり半分が余儀なく課された＜脱成長＞、半分が選択した＜脱成長＞だ。最も弱い立場にある人たちの生活環境がさらに悪化した場合―特に家庭内暴力の場合には一、簡素さは、それにもかかわらず、より多く存在する、私たちの社会的関係、家族の関係、交友関係は、私たちの貴重な救済手段となっている。生産の場所を元に戻すこと、地産地消、スローライフやある断念について語り合うのを耳にする。私たちは、連帯と創造性のテゾに参加したり、出くわしたりして、春の目覚めを夢想する。要するに、存在することの単純な喜びが顕在化しているだ。これは、共通の社会組織のおかげで1945年以降の民主的な最低限度の生活の成果であり、今もなお本質的なものである一定の社会平和を保証している。確かにマクロン大統領は「我々は戦争をしている」と宣言している。しかし、言葉の意味を歪曲しない限り、生政治的な目的で、倒すべき敵も殺すべき人間もいないので、戦争ではない。確かに死者たちはいる；それは確かに半分、戦争かもしれないが、地平線上のどこにも敵はいない。半分の戦争、したがって半分の平和は、主に病気の治療へのアクセスを可能にすることによってハジメチックを制限している公共サービスと個人的なケアの担当者によって、非常に幅広く確保されている。公共サービスをたけてなく、それらの雇用もすべては、一昨日、円形広場にいた多くの人々（訳：黄色いベスト運動の参加者）のこの「底辺のフランス」は、今日は「職務の最前線」に立っているのだ。全般的な崩壊なしにだ。国家の崩壊でさえなく、とはいえ、経済にブレーキをかける政治的決定をしたその大胆さに唖然としているかのようだ。不幸にも、警察の権限とその例外的な法的実験をてぎる限り強化することによって、権力は、自分自身で安心しているのだ。

死か潜んでいる半戦争、潜むことか禁止になったゆえの半平和。死-すへでの生命の限界である-は恐怖させる。特に、無限な成長だと主張されていた政治体制において、死を否定する社会組織として解釈でざる成長。死は恐怖をもたらす、そして、恐怖の悪用は、自身の権力を維持しようとするあらゆる権力にとって、常に都合のいいものである。それゆえに半戦争なのだ。

＜脱成長＞にとっての教訓：もし＜脱成長＞が、どういふものであれ、悪い恐怖心に触れると、＜脱成長＞は崩壊する。＜脱成長＞は、括弧内の条件付きだが、平和の中で行われるのだ。

**封し込め**によって閉じごもっていても、「予測不可能なことから起こった」というこの確認できる事実を振り返ってみよう。**封し込め**によって、政府か経済よりも命を救うことを選択してきたという事実を、十分に認識してもいいのではないか。羞恥心の保留されたステップなのだろうか？ 私たちの暮らしの社会的状況の多様性かどのようなものであっても、この度の状況は誰にとってもそう安易ではないことは明らかだか、この瞬間を繊細に味わってみようではないか：例えば、エコロシガルフットプリントが軽減されること、私

たちを結びつける絆の質感、沈黙の厚み、軽くなった空気、私たちの暮らしの色、生活のさびめきなど。。。“カルヘ・テイエム « (日をつかもう!) た! ”記憶にあるこのあじわい、塩の風味、一緒に生きていく意味のおもしろさを忘れないようにしましょう。**封し込め**でその日をつかもう!

要するに、この”**封し込め**”は半分＜脱成長＞なのだ。すなわち、ほとんど合意されたこの**封し込め**の瞬間ほと＜脱成長＞に似たものは今までなかった、と、私たちはあえて追認しようではないか。特に（ほとんど）配給のすべてのシェアがあるだけに。

嫌悪された一つの社会から望ましい一つの社会へ

私たちのエコロシガルフットプリントは、現在、世界的にも平和的にも減少している。“事実によって”この瞬間は、エコロシ的に人類にとって、より持続可能なものになっている。脱成長するこの括弧付きのエコロジカルな総合評価は、反論の余地のないものになるだろう。すなわち「それは猶予の時間、休息の時間たづた」のだ。しかし、”**封し込め**後”は何を期待できるのか？

経済的には、また別の話になるのは明らかだ。さらに悪いことに、社会的には、私たちの他者への関心と、私達の他者への心配は、この**封し込め**がもたらす暗黒面を、譲歩することなく糾弾することを義務づけている。ハジメチックかとりわけ貧困層、経済システムによって困窮した人々を襲うという事実を認めざるを得ない。何よりも、超富裕層の狼狽さは確かに**封し込め**されてはいるが、消滅していない。政府からの奇跡は望むべくもない。社会福祉的に真つ当な社会で、すへでの人々（男も女も）の分かち合いと安楽な暮らしを保障するために、富裕層の富を吸い上げる(戦後のように富と所得に対する例外的な賦課金を通して)ことは(また)問題ではない。＜脱成長＞の不平等は、また今ではない。

当分の間、それはむしろプログラムの時間…と年の変化だ…。つまり1984年、あなたはここにいる！ ヒック・フラサーは本当にここにいるのだ、彼は私たちを見ている、SMS メッセージを送ってくる、私たちを監視し、記録している、トローンの上から話しかけてくる、スマートフォンを介して私たちを追跡してくる、私たちを分離させる、私たちを個別化する。テクノロジーのセンスは確かに政治的なものだ…。リモートワーク、遠隔医療、遠隔教育、スカイプを介した食前酒の飲み会、などなど。スクリーンは私たちの繊細な世界を狭める。今まで離れていた者同士しか繋がれないソーシャルネットワークの加速。ここでも、小さな政治的なディテールだが、権力の共有に関する限り、何の奇跡も起こらない。つまり、諸政府は、私たち抜きで、ひとりで決定する。従って私たちに対抗する、とごもかしこも民主主義は隔離されている。馬の業はそこにある。すなわち何でも処方箋が全てを支配する。民主主義的に言えば、それは喜びではない。とりわけ私たちが、通常法に紛れ込んだ非常事態宣言の一撃を食らっていることを喚起するなら。

これらがとりあえず、現時点においての**封し込め**の教訓である。 A/この封し込めは、カッコを開いてしまった。＜脱成長＞派の皆さん、それを心に留めておこう。私たちは夢を見つづるのではない。すなわち私たちの＜脱成長＞の夢はそれゆえに可能なのだ。この意味でば、＜脱成長＞とは括弧内の特定の期間であり、抽出、生産、消費、交通、廃棄物の減少を通して、エコロジ的に耐えることができ、社会的にまともて、民主的に組織化された社会に向けた自己組織的な行程である。 B/ **封し込め**の括弧が正式に閉じるとき、私たちは成長の想像力によっては、脱植民地化された世界に奇跡的に到着しないであろうことを知っているし、経済はその物語、その負債、その再調整をゲームのようにまた私たちに押し付け、偏った主権のサービスで、化粧品生産工場の再配置転換を道具化するだろうことを知っている。...しかし、彼らの反撃の時てさえ、私たちは新しい論理を獲得するだろう。そう、政治家は経済にブレーキをかける決断をすることかできる。私たちはそれを肌で体験したことかあるだろう。

＜脱成長＞とは、世界を、然るべき場所で（再度）休止させるための良識なのだ。

注：＜脱成長＞とは：エコロジカル・フットプリントを削減すること